

## C25c 国友一貫斎藤兵衛製作の反射望遠鏡

渡邊文雄（元 上田創造館）, 国友望遠鏡調査研究チーム

今から170年以上前1832年～1835年（天保3年～6年）近江国国友村（琵琶湖東岸、現在長浜市の郊外）の鉄砲鍛冶、国友一貫斎藤兵衛（1778～1840年、以降一貫斎と記す。）は江戸の尾張藩付家老成瀬隼人正宅で見たヨーロッパ製の反射望遠鏡の記憶と、蘭学からの僅かな情報を元にほぼ独力でわが国最初の反射望遠鏡（グレゴリー式）を製作完成させた。

一貫斎は江戸時代後期の日本を代表する鉄砲鍛冶であり、生来の器用さと、江戸滞在中に得たと考えられる蘭学の知識当を糧に、その業績は非常に多岐に亘っていた。

本調査の対象となった、グレゴリー式反射望遠鏡は1937年に長野県上田市微古館（現上田市立博物館）に市民から寄贈された望遠鏡であり、一貫斎製作の反射式望遠鏡は現在までに4台が確認されているうちの初号機である。

本調査研究は1997年～2001年に掛けて（国友望遠鏡調査研究チーム）によって行われ、各種の機会を捉えその都度発表して来たが、2012年には重要文化財の指定を受けている。現在国立天文台でもミュージアム構想があると聞いているが、デジタルアーカイブ等で国内の天文学資料が系統的に展示管理されるとその学術的価値もさらに高くなるのではないかと考えている。